慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中村菊男著『昭和政治史』
Sub Title	K. Nakamura : The Japanese political history of Showa period
Author	石川, 忠雄(Ishikawa, Tadao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication	1958
year	
Jtitle	法學研究:法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and
	sociology). Vol.31, No.10 (1958. 10) ,p.92- 97
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara id=AN00224504-19581015-0092

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



中村菊男著

『昭和政治史』

本書は、著者もいうように、「滿洲事變頃から太平洋戰爭敗戰に 本書は、著者もいうように、「滿洲事變頃から太平洋戰爭敗戰に たれは、いうまでもなく、使用される資料があまりにもなまない。それは、いうまでもなく、使用される資料があまりにもなまない。それは、いうまでもなく、使用される資料があまりにもなまない。それは、いうまでもなく、使用される資料があまりにもなまない。それは、いうまでもなく、使用される資料があまりにもなまない。それは、いうまでもなく、使用される資料があまりにもなまない。それは、別存する政治勢力の利害と直接結びついたものが少くないために、極めて重要な資料が公表されなかつたり、公表された資いために、不断に且つ着質におこなわれなければならない。なぜなの努力は、不断に且つ着質におこなわれなければならない。なぜなの努力は、不断に且つ着質におこなわれなければならない。なぜないように、「滿洲事變頃から太平洋戰爭敗戰にれたがある。

親角よりする日本近代化過程の研究をつうじてその政治學的成果を利角よりする日本近代化過程の研究をつうじてその政治學的成果を連貫に、こんにちまでにすでに、「政治學」(全訂版・有信堂・昭和三十二年)・「政治心理學」(改訂版・有信堂・昭和三十二年)・「民主社會主義の理論」(青山書院・昭和二十七年)・「近代日本の法的形成」(有信堂・昭和三十二年)・「民主社會主義の思想」(青山書院・昭和二十七年)・「近代日本の法的形成」(有信堂・昭和三十二年)・「民主社會主義の思想」(青山書院・昭和二十七年)・「近代日本の法的形成」(有信堂・昭和三十二年)・「民主社會主義の思想」(青山書院・昭和二十七年)・「民主社會主義の思想」(青山書院・昭和三十二年)・「民主社會主義の思想」(青山書院・昭和三十二年)・「民主社會主義の思想」(青山書院・昭和三十二年)・「民主社會主義の思想」(東京社会))(東京社会)(東京)(東京社会)(東京社会)(東京会)(東京社会)(東京)(東京社会)(東京)(東京会)(東京社会)(東京社会)(東京社会)(東京社会)(東京社会)(東京社会)(東京社会)(東京社会

ばならない。 味においても昭和政治史を書かれるうえに適任であるといわなけれ際富にし發展させていくところにおかれているようであり、この意

みみることも少くない。このような見方が昭和政治史を正しく理解 らず、とかくなおざりにしがちなものである。われわれが、政治に 調させた重要な原因が日本の共同社會そのもののなかにも存在して ことはたしかであり」(序三頁)、このように國民を軍國主義化へ同 ある。またいま一つは、昭和政治における軍國主義の進出にあたつ 合理的性格」からもとらえられなければならないとしていることで 頁)のであつて、昭和政治史の過程は「自意識過剰なこの政治の非 情家が出現してそれが世の中を動かすにいたる理由がある」(序四 非常に重要な役割を演じるという事實であり、ここに「熱血漢や激 すなわち、その一つは、政治においては人間のもつ非合理的性格が ておきたいのは、著者が昭和政治の展開過程を考察する にあたつ するうえになんら役立ちえないものであることはいうまでもないと を軍國主義的指導者の指導と宣傳によつて欺かれた被害者としての とであり、日本の軍國主義化の過程を分析する場合でも、一般國民 や思考によつてみちびかれたものとして考察することはよくあるこ おける人間の行動をイデオロギーによつて支配され、合理的な判斷 和政治の展開過程を考察する場合に、自明の事質であるにもかかわ いたということである。著者のいうこの二つの點は、 ところで本書の內容の紹介にはいるまえに、ここでとくに指摘し 日本國民がそれに「大小强弱の相違はあれ、とにかく同調した つぎの二つの點に深い注意をはらつているということである。 われわれが昭

のである。

を検討しようとした意圖は、十分評價されなければならないと思うを検討しようとした意圖は、十分評價されなければならないと思うにならない。もつとも、これらの課題を完全に管現することは、決におこなうことができるならば、それはわれわれの昭和政治史に對におこなが、軍國主義の被害者でありながら同時に日本の軍國主義化を促す要素をもつていたという二面的性格を、昭和政治の具體的なを促す要素をもつていたという二面的性格を、昭和政治の具體的なを促す要素をもつていたという二面的性格を、昭和政治の具體的なを促す要素をもつていたという二面的性格を、昭和政治の異関的なを促す要素をもつていたという二面的性格を、昭和政治の最別過程のなかで適益に担対している。中国政治の意思ができるならば、それもまたはならない。もつとも、これらの課題を完全に管現することは、決ばならない。と思うとは、大個のもつまとは、決して容易なことができるならば、それはわれならないと思うと検討しようとした意圖は、十分評價されなければならないと思うと検索が、単位というには、大の関係を表する。

ところで本書の内容についてであるが、本書は全部で十一章からところで本書の内容についてであるが、本書は全部で十一章からなりたつている。しかし、内容的にみて、だいたいこれを四つの部分に區別することができるように思われる。すなわち、第一の部分は、甲本近代化の過程とその性格の分析をつうじて昭和における軍國主義整頭の基礎を明らかにしようとした部分であり、第二の部分は、軍國主義勢力の擡頭と政黨政治の沒落から日華事變および太平は、軍國主義勢力の擡頭と政黨政治の沒落から日華事變および太平は、軍國主義勢力の擡頭と政黨政治の沒不のおりである。そこでつぎに、この四つの部分について、そのかつた部分である。そこでつぎに、この四つの部分について、そのかつた部分である。そこでつぎに、この四つの部分について、そのかつた部分である。そこでつぎに、この四つの部分について、そのかった部分である。そこでつぎに、この四つの部分について、そのかった部分である。そこでつぎに、この四つの部分について、そのかった部分である。そこでつぎに、この四つの部分について、そのかった部分である。そこでつぎに、この四つの部分について、そのかった部分である。そこでつぎに、この四つの部分について、その部分に対している。

評

時の明治政府の指導者はこのような條件のもとに外國勢力と對等の 基本的特徴を指摘し、それらの特徴との關連において軍國主義擡頭 あたる。この章で著者は、日本近代化過程にあらわれたいくつかの たように藩閥勢力の中心的目標の一つであつたばかりでなく、當時 くりだすこととなつたのである。しかし、軍事力の擴充は、前述し 位における藩閥勢力と政黨勢力との 權力分割」(七頁)の狀態をつ ではあつたが立憲制度のもとに、明治から大正にかけて「藩閥の優 に對する不滿分子と結んで自由民權運動を發展させ、不徹底なもの 新以降自由主義思想も輸入され、その影響をうけた人々は蔣閥勢力 とによつて實現しようとしたのである。もつともその反面、明治維 部官僚を支柱とする强力な中央集權的な體制を つ くる」(宍頁)こ けれども、眞の意味における民主主義的な近代思想の持ち主ではな 手であつた當時の指導者は、封建體制に對する不満分子ではあつた とを實行しなければならないと考えた。がんらい、明治維新の擔い 地位に日本を引きあげるためには、「産業の近代化と軍事力の擴充」 つたものは、不平等條約その他に象徴される外國の壓力であり、営 新以來、近代的國家體制をつくりあげるにあたつて重要な障害とな 部分をなしているように考えられる。著者によれば、日本が明治維 の諸要因を明らかにすることに努めており、本書でもつとも重要な まず第一の部分であるが、第一章近代日本政治の進展、がこれに したがつてかれらは、「蓬業の近代化と軍事力の擴充」とを「軍 有識者層全體をつうじて廣く承認されていた考え方であ

頁 ŋ 造は外觀的には天皇歸一というかたちで一元化されていたようにみ 論」に言及し、日本には「中心となつた政黨もなく、長期にわたつ を概括的に明らかにしたのち、滿洲事變後太平洋戰爭の敗戰にいた 機感を増大させ、革新思想の擡頭とその政治への進出とをまねくこ の到來、 のような狀態に對する不滿と近代戰の必要にこたえるべき國家體制 る地位は、その影響をうけて壓迫され、低下することとなつた。こ をあたえ、著者のいう「なしくずし民主主義」の前進が おこ なわ 民主主義の風潮は日本の政界、學界、思想界、言論界に大きな影響 で大きな役割を果してきたのであるが、第一次世界大戦後における である。このようにして、軍部は、明治維新以來、日本政治のなか 部重視の考え方を支える精神的風土と社會勢力とを形成していたの 部尊重の考え方」が存在し、それが天皇中心主義と結びついて、軍 と考えていた。しかも、日本共同社會の內部には、「軍人優先、 が朝鮮半島からアジア大陸に進出する」(九頁) ことが必要である えるが、實質的にいえば、權力は多元的 に 分散化され」(二六―七 て持續的に安定せる指導勢力となつた人々もなく……政治權力の權 る軍部中心の政治體制をファシズムと規定する「天皇制ファシズム ととなつたのである。著者は、このような軍部勢力進出の基礎條 の强化の要求とが、日本における立憲制度の不徹底性、經濟的危機 れ、政黨政治の全盛時代にはいるとともに、軍部の日本政治におけ ていたのであつて、これをファシズムと規定することはできな かれらは、西歐諸國のアジア進出を防衛するためには、「日 としてその見解を明らかにしている。 政鷲の權力闘爭と腐敗などの諸條件と相俟つて、 軍部の危

革新勢力と派閥對立がうまれ、それが民間右翼勢力と結びついて、 **衝突はなにをもたらしたか。第五章政黨政治はいかにして凋落した** 終結にいたるまでの經過の考察にあてられており、第二章軍部勢力 力の缺除と相俟つて關東軍を中心とする滿洲事變の計墅となり、滿 とを指摘していることである。そして、このような「當時の雰圍氣 經濟とくに農村經濟の破綻と結びついてつくりだしたものであるこ 的革新思想の影響をうけて歸國した少壯將校の革新熱、および日本 その他の医迫に對する「軍人社會の欲求不滿」が、海外の全體主義 政策推進の動力となつた「當時の雰圍氣」は、第一次大戰後の軍縮 る突破口をひらいたものである」(六八頁)とし、 その軍部の大陸 的解決手段であり……軍部が日本の現代政治の推進力として活動す **満洲事變を「日本國内情勢のうつ積した空氣を打破するための對外** についての分析にあてられている。ここで注目されるのは、著者が 滿洲事變勃發の原因の究明から日華事變の發生にいたるまでの經過 的なものにした過程を明らかにしている。第三章および第四章は、 利によつて統一され、軍部勢力の政治進出と大陸政策の推進を決定 ついに二・二六事件にいたつて皇道派對統制派の對立が統制派の勝 いわゆる三月事件、十月事件、さらには五・一五事件をひきおこし、 けて、蒸閥勢力の統制力が失われていくにつれて軍部内にしだいに 六章がここにふくまれる。著者はまず第二章で、大正から昭和にか はいかにして擡頭したか 第三章漸洲事變勢發する 第四章日華の 第二の部分は、軍部勢力の擡頭から日華事變を經て太平洋戰爭の 軍をしてその吐け口を大陸にもとめさせ、それが軍內部の統制 第六章日本太平洋戦争に突入する 第七章榮光から悲劇へ、の

> する契機となつたことを明らかにし、日華事變に際して軍には よつて貿易による海外進出を阻止されはしないかという懸念をいだ 進することになつたとしているので ある。 もあつて軍部勢力の政治進出を可能にし、さらには日華事變へと前 洲國の成立にみちびくとともに、これに期待をつないだ國民の同調 敗、汪政權の樹立などを經て太平洋戰爭へと擴大の一途をたどるこ を示すものといえよう。かくて日華事變は、トラウトマン調停の失 日エネルギーの大きさを見誤つた當時の軍の國際情勢評價のあまさ た、と述べているが、これは第二次國共合作を背景とする中國の抗 いまのうちにたたいておけば何とかなるといつたような気持があつ の日本の中國進出について、日本が諸外國のブロック經濟の强化に とになるのである。 それが中國を確保しなければならないとする見解をさらに促進 著者は、 日華事變直前

がれ、右往左往していた」(一一九頁)のであつて、政黨を政權かても、それに對抗する政黨勢力の無力さがなかつたならば實現されても、それに對抗する政黨勢力の無力さがなかったならば實現されたがつてに相違ない。したがつて政黨勢力凋落の過程を明らかにすることは、軍部進出のもつとも重要な條件を分析することであり、政に絕對多數をもつ一國一黨的な强力政黨を欲する動き」があり、政に絕對多數をもつ一國一黨的な强力政黨を欲する動き」があり、政に超對多數をもつ一國一黨的な强力政黨を欲する動き」があり、政に超對多數をもつ一國一黨的な强力政黨を行動がおこなわれて、「みずからの立脚點をわすれ關係の地位にあこいたばかりでなく、「みずからの立脚點をわすれ關係の地位にあるいたばかりでなく、「みずからの立脚點をわすれ關係の地位にあるいたばかりでなく、「みずからの立脚點をわすれ關係の地位にあることに対象を表する。

することとなつたのである。 対ることとなったのである。 対ることとなったのである。 対ることとなったのである。 がくて、昭和十年の國監明徴問題を契機とする國民意識のである。 かくて、昭和十年の國監明徴問題を契機とする國民意識のである。 がくて、昭和十年の國監明徴問題を契機とする國民意識のである。 がくて、昭和十年の國監明徴問題を契機とする國民意識のである。 がは、 についてもこれに抵抗せず、 に対しても強い抵抗を示さなかった

リカが講和條約と日本の安全保障について考慮せざる を え なくなどする共産主義勢力の進出、朝鮮動風の發生、などを機會に、アメをする共産主義勢力の進出、朝鮮動風の發生、などを機會に、アメをする共産主義勢力の進出、朝鮮動風の發生、などを機會に、アメとする共産主義勢力の進出、朝鮮動風の愛生、などを機會に、アメとする共産主義勢力の進出、朝鮮動風の愛生、などを機會に、アメとする共産主義勢力の進出を概視し、中華人民共和國の成立を契機第二の部分は、占領時代における日本の政治體制變革の過程を考第三の部分は、占領時代における日本の政治體制變革の過程を考算三の部分は、占領時代における日本の政治體制變革の過程を考算三の部分は、占領時代における日本の政治體制變革の過程を考算三の部分は、占領時代における日本の政治體制變革の過程を考算三、

り、この時期の政治の一般的經過を紙観するのに便利である。
あれている。この間の敍述は、簡潔に且つ要領よくおこなわれてお後の内閣の變遷、二大政黨對立時代の到來、日ソ國交問題について結するにいたつた經緯を説明している。また第九章では、講和條約り、一九五一年九月の對日講和條約、さらに日米安全保障條約を締り、一九五一年九月の對日講和條約、さらに日米安全保障條約を締

命論から暴力革命論への轉換、などについて述べられている。 一章主義運動から戦後になつて今日の日本社會黨がうまれてくは戦前の無産運動から戦後になつて今日の日本社會黨がうまれてくは戦前の無産運動から戦後になつて今日の日本社會黨がうまれてくるまでの經過の分析にあてられているが、この章の分析は極めて要をより返していつた經過およびその原因についての分析、さらに戦をくり返していつた經過およびその原因についての分析、さらに戦をくり返していつた經過およびその原因についての分析、さらに戦をくり返していつた經過およびその原因についての分析、さらに戦をくり返していつた經過およびその原因についての分析、さらに戦をにおける日本社會黨の性格についての論手、その分裂と統一にかんする彼述はとくにすぐれているように思われる。また第十一章でんする彼述はとくにすぐれているが、この章の分析は極めて要は、コミンテルンと日本共産黨との関係、戦前の弾医下における共産主義勢力の衰退、戦後の黨の再建とコミンフォルム批判、平和革産主義勢力の衰退、戦後の黨の再建とコミンフォルム批判、平和革産主義勢力の衰退、戦行の政策をはいるが、大きについて述べられている。

=

言つけ加えておきたいと思う。以上が本書の內容の概要であるが、ここでわたくしの證後感を一

的にとりあげられ、昭和政治の展開過程は要領よくまとめられてい概觀したものであり、その意味において昭和政治史の諮問題が包括との書物は、前述したように、昭和史を主として政治的側面から

ることは、本書のすぐれた特徴であるといつてよいであろう。 ない點がないでもない。いまそのいくつかをつぎに述べてみよう。 國主義化の要因の一つを日本共同社會そのもののなかにもとめてい る。とくに、著者が政治における非合理的性格を强調し、日本の軍 し、問題をやや詳細にみてみると、なおとりあげられなければなら しか

ころである。したがつて、昭和時期をつうじて、東洋をめぐる國際 ついて一層の配慮が望ましいと思う。 要因がさらにはつきりしてくるように思われるのである。 細に究明されれば、日本の大陸政策の推進、さらには職爭突入への 情勢の推移および國際情勢に對する軍部および各界の判斷がより詳 かれらを戰爭へ導く一つの大きな力となつたことは否定しえないと な評價が缺けていたことは明らかであり、このような評價の誤りが いつていつたについては、軍部を中心として國際情勢に對する正當 周知のように、日本が滿洲事變・日華事變を經て太平洋戰爭には この點に

んに政黨間の權力獲得闘爭とか政黨の腐敗とかいうことではなく、 **重要であるといわなければならない。この問題については、ただた** 極的に對處しえなかつたのか、という問題を究明することは極めて て、政黨が、政權からしめ出されるまで、なぜ軍部勢力に對して積 につくことは、極めて困難なことであつたに相違な い。し た がつ て確立されていたならば、軍部勢力が日本政治のなかで指導的立場 治進田を企圖したとしても、もし政黨勢力がそれに對抗する力とし あり、いかに軍部勢力が革新思想の影響をうけその欲求不滿から政 政黨勢力は、軍事勢力に對抗するもつとも重要な政治勢力の一つで 第二の問題は、政黨勢力の衰退についてである。いうまでもなく

> り詳細な研究が必要であるように思われるのである。 されなければならないであろうし、日本の共同社會の性格および日 個々の具體的なケースについて政策が軍部勢力の進出に對してどの したということもいえるのではなかろうか。これらの點についてよ 方で軍部を批判しながら、他方でそれに同調するような性格が存在 本近代化の不徹底性との關連において、政黨それ自身のなかに、一 ような内部的事情からどのような對應の仕方をしたかが詳細に檢討

いように思われるのである。 本共同社會の性格についてはもつと掘下げて檢討しなければならな 心をもつわれわれにとつて極めて重要な問題であり、著者のいう日 に考えられるべきであろうか。これらは、いずれも昭和政治史に關 あろうか、またそれは、日本民主化との關係において現在どのよう あろうか。またもしそうであるとしたならば、このような日本共同 國主義化の方向へのみ働くようなものであつたことを意味するので が、日本における民主主義の發展を阻止するような性格をもち、軍 ろう。しかしそのことは、著者のい う日本共同社會內部の諸要因 社會の性格は太平洋戰爭の終了後どのような變革をこうむつたので 進出を支持するような要因が形成されていたということは事質であ 最後に、著者の指摘するように、日本共同社會の內部に、 軍部

それは、昭和政治史を包括的にとりあつかつた本書の價値を損うも かりでなく、 廣く一般に讀まれてもよい書物である よう に 思われ のではない。わたくしには、本書は、日本政治史を専攻する人々ば もちろん、これらは、わたくしの希望を述べたものにすぎない。 (慶應通信 三六〇圓 (石川忠雄)

٤ 批

九七

(八七二)